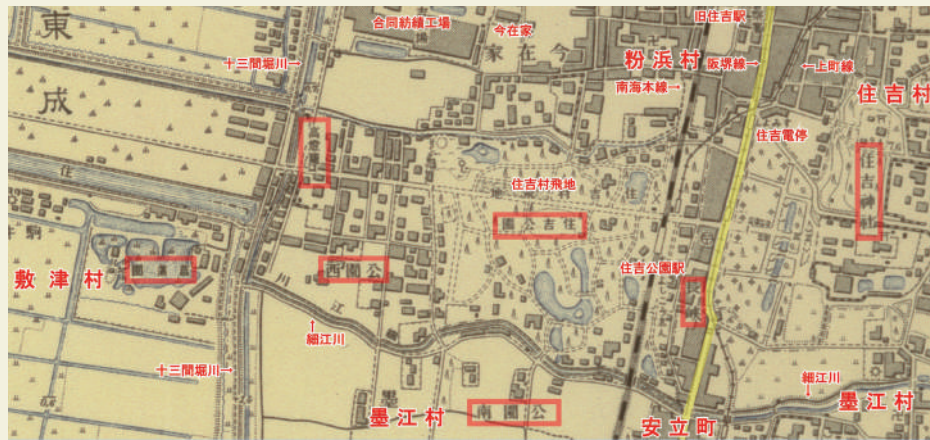


歴史探訪



大正10年(1921)測図の1万分の1(住吉)の地形図:国土地理院

明治・大正・昭和期の公園利用から見る住吉公園の成り立ち 大正七年頃の住吉公園第一回目大改修に着目

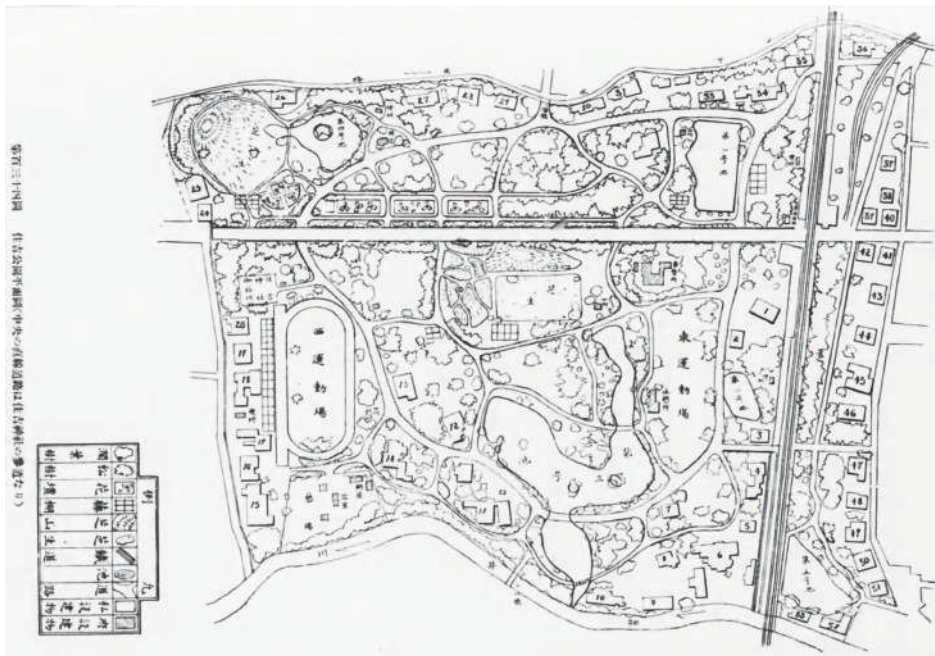
住吉公園の成り立ちを明治・大正・昭和期の公園利用からひも解くと、まず住吉公園の平面図は、大正二年から同六年までと、大正七年から昭和十三年まで、昭和十三年から野球場などができるまで、昭和六十三年からの「花ふる大阪」事業による改修と、四つの大きな変化があります。

今回は、大きな変化がもたらされた大正七年頃における住吉公園の大改修に着目します。(下図)

当時の住吉公園には二つの問題がありました。一つは狭い公園に多くの茶屋があり、そのため風紀が悪いことでした。もう一つは松樹の枯損でした。大阪府では改修のための調査を実施し、大正六年に改修案を府議会に示しております。住吉公園の大改修では、茶屋や料亭を公園の中心から排除するとともに、その数量の削減を図りました。さらに大正十一年には現状を追認する形で公園南側・浜口町一帯を「芸妓居住地」として指定し、住吉神社周辺の貸座敷や芸妓をこの区域にまとめるなどの対策を行いました。また、警察においても公園内の風紀取締りを強化することとなり、その結果、茶屋、料亭等は営業困難となり、しだいに民家へと形態を変えていくことになりました。そのことが、現在でも公園内に民家が多数存在する原因となったのです。

大正七年から始まる公園の改良計画の特徴は、次のようにまとめられます。

- ① 池は「雅致」に欠けるとされ、数を減らし、残すものについて雅致を有するよう変更。
- ② 運動場は極めて狭いので池を埋め立てた部分を以て拡張。
- ③ 園路は計画されたものではなく、排水も悪く、樹林地を踏み荒らすなど問題があるので、系統的に園路を改廃。
- ④ 松樹が最も枯死している地区については樹種を



大正9年(1920)住吉公園平面図
農學博士 大屋靈城著「計畫・設計・施工 公園及運動場」より

変えるとともに、圃場や花壇に変更。また周囲には常緑闊葉樹を多く植え替え、さらに枯死した松樹を補植。

実際、住吉公園の改良計画では、まず池が整理されています。とくに西側の池は全て廃止され運動場に変わっています。中央の池については趣のある心字池に作り替えられています。また、園路は計画的に配置され各施設を回遊するように廻らされています。そして、料理屋、茶屋などが公園の中心部から周辺部に移転させられ、特に南海電車の東側への移転がよくわかります。(荒木美喜男・蕭閑偉)

住吉公園

歴史探訪 第1号



発行日:2018年12月1日
(季刊:3月・6月・9月・12月発行)

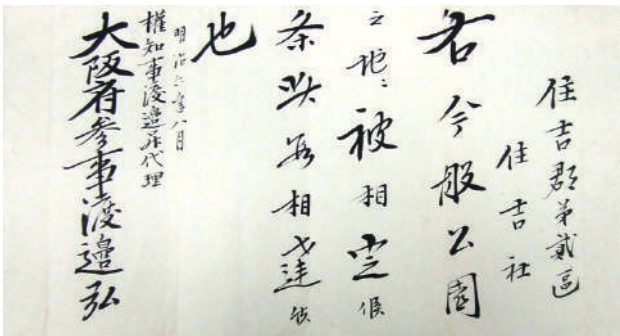
明治6年に開設された大阪府営住吉公園は、2023年に開設150年を迎えます。「住吉公園 歴史探訪」では、住吉公園150年記念事業として住吉公園の歴史をたどり、開設当初からどのように利用され、どのような変遷を遂げてきたか、悠久の歴史に想いを馳せてみたいと思います。

住吉公園一五〇年記念事業

住吉公園の誕生

ご存知ですか?住吉公園は日本最初の公園

住吉公園は、明治の新政府からの通達によって大阪で最初に指定された公園です。草創期は住吉大社の境内を母体として誕生し、はじめは歓楽遊興の公園として、後には都市型の府営公園として、今日まで府民に広く親しまれています。



住吉大社境内地公園化についての通達文
寺田家文書 大阪市史編纂所 寄託

これを受けて、大阪府下でも公園地が選定され、同年の八月二日、住吉大社の境内全域をもって最初の公園地指定となりました。また、九月には『公園地規則』が制定され、名実ともに住吉公園の開設となったのです。その後、十二月には浜寺公園も開設されました。

指定時の住吉公園は、江戸時代までの住吉大社の境内地すべてを対象としました。その広さは相当なもので、約二十二・二ヘクタール(六万七千四百一十坪)もありました。現・住吉公園は八ヘクタール程ですが、



明治8年(1875)10月住吉神社境内測量図
寺田家文書 大阪市史編纂所 寄託

ら、当初の領域には現・住吉公園と住吉大社のほか、相当に広範囲を含んでいたこととなります。現在の住居表示でいえば、住吉区の住吉二丁目九ノ十七番、長峽町、住之江区の浜口東二丁目、浜口西二丁目にあたります。

誕生時の公園は、はじめは従前通りに神社側の管理が継続されましたが、まもなく公園地規則にもとづいて取締人に移管します。この時、住吉大社欄宜の大庭発、同主典の橋本光全の神職二名が初めて公園取締人に就任しました。

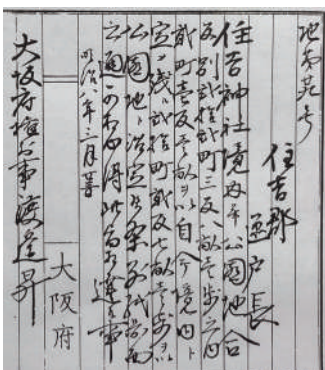
さらに、明治七年(一八七四)五月には公園地の「お砂持ち」勧進が実施されました。当時の公園地内には各所に低地がありましたが、これを埋めて地ならしを行うために、広く庶人に呼びかけて砂を持ち寄せて造成が行なわれました。記録によれば、砂持ちの立札が、日本橋・心斎橋・千代崎橋・新町橋・本町橋・天神橋・淀屋橋といった大阪を代表する七橋に立てられ、住吉大社の崇敬者を中心に大阪近隣の市民に対して勧進を募ったようです。

やがて、神社と公園が混在する状況を決するため分離が行なわれました。明治八

年(一八七五)三月二十三日、住吉公園地(旧住吉大社境内)の内、神社境内地は約二ヘクタール(六千三百三十坪)に、新たに住吉公園地は約二十ヘクタール(六万八千一百坪)に分割されました。その後の測量実施や区割変更などを経て、最終的には公園地を約十二・七ヘクタールに、神社境内地は約五・八ヘクタールに、その外は官有地・民有地として除外して、明治十年(一八七七)二月三日付で登記となりました。現在は公園地の大半が国有地となっています。(小出英詞)

公園創設期関連史料を読む 寺田孝重所蔵・大阪市史編纂所寄託

明治初期、住吉神社のある大阪府第七大区二小区の区長を高祖父である寺田忠重が務めていました。また、江戸期より住吉神社の重要な所領である住吉郡七道村が高槻藩領でもあったため、当家が庄屋職を兼務していた関係や、当地域の郷社である大依羅(おおよさみ)神社の復興を住吉神社が行い、このときの幹事役も務めていたことなどから、住吉神社の公園化に関して各種の関与があったものと考えられます。とくに明治八年住吉神社境内測量図は、忠重自身が測量を行っており、この方面の技術も持っていたものと思われます。(寺田孝重)



明治8年住吉公園地の面積変更に関する通達文書
「地第廿九号」
寺田家文書 大阪市史編纂所 寄託

『摂津国一之宮住吉社御境内領地絵図面』江戸後期：住吉大社蔵